

ディスレクシアを知ってください

中 二

「字がグニャグニャするの……。」

弟の言葉に耳を疑い、

「えっ、何を言っているの。おかしいじゃないの。」  
と返してしまったことを、私は今も忘れない。

私の弟には、「ディスレクシア（識字障害）」という障害がある。本に書かれた文字がゆがんで見えてしまう障害で、音読が上手くできず国語はずっと苦手科目だ。特に細かな文字はゆがむので、小学校高学年になるにつれて、複雑な漢字や英語など、苦手が増えるばかりだと弟は言っている。ただ、弟の場合は、それ以外に何か困ることはない。コミュニケーションの問題で友達とトラブルになることもないし、いじめを受けるようなこともなかった。逆に、特別と言っていないほど、弟は絵がうまい。特に大好きな昆虫の絵を描くが、昆虫が大嫌いな私は、気持ち悪くて見たくないほど、細かくてうまい。弟以外の家族は全員がへただ。

そのせいか、この症状が、障害だと分かるまで

には、とても時間がかかった。最初に症状に気付いたのは、私が、小学一年生になったばかりの弟に、教科書の読み方を教えていたときだった。私が弟に、

「どうしてそんなに読み方が遅いの。もつとスラ  
スラ読んで。」

と怒って伝えたとき、返ってきた返事が、  
「字がグニャグニャするの。」

というものだった。弟は泣きながら言ったが、怒っていた私は言い訳だと疑って、ひどい言葉を返したのだった。しかし、これを見た看護師の母は、この言葉をきっかけに、インターネットで障害について調べ始め、病院に行くことを決めた。母から聞いた話では、最初の病院での「様子を見てください。」に始まり、「小さい子はこんなものです。」など、様々な医師からいろいろな意見をもらったとのことだ。しかし、最終的に、大きな大学病院に行き着いて、ディスレクシアだと診断された。初めて病院に行ってから、その診断をされるまで三年以上かかった。

母が言うには、ディスレクシアは、

「有名ではないけれど、たくさんの人にある障害。」

とのことである。欧米では、人口の十から十五パーセントがディスレクシアだと言われていて、有名な俳優トム・クルーズさんにも、その障害があるという。トム・クルーズさんが、映画の台本をアシスタントの人に読んでもらって覚える話は、現地では有名らしい。しかし、日本ではディスレクシアは「まだ」有名ではない。「障害」にも、有名かそうでないか、重いかそうでないかなど、障害の種類は様々あるが、それと比べたらディスレクシアは重くない分類の障害なのかもしれない。でも、弟にしか分からない大変な思いを私は知っている。漢字テストは再テストが多いし、算数は文章問題になると急に間違いが多くなる。だから弟は、私よりたくさんさんの時間を勉強に使って、私よりたくさんさんの努力をしている。しかし、それは家族以外の誰も知らない。知らない人たちは、文字のゆがまない「障害のない人」と比べて、努力が足りないと思ってしまう。弟がディスレクシアであることを知られるのは、どこか嫌な気持ちもあるが、知られないままだと弟が努力していないように思われるのも悲しい。

母は当時十歳の弟に、ディスレクシアのことを

伝えるときに、こう言った。

「世界には文字がグニャグニャして見える人と、グニャグニャしない人がいて、君はグニャグニャして見える人なの。それで、グニャグニャして見える人の人数は少ないから、ちよつと困ることがあると思うの。でもそれは不幸ではないよ。困ったことを乗り越えられたとき、幸せな気持ちになるでしょう。だから、家族みんなですぐに困ったことをたくさん乗り越えて、みんなですぐに幸せになろうね。」

と家族みんなの前で話した。

きっと文字が「ゆがむ」世界と「ゆがまない」世界の二つがあることをみんな当たり前に理解してくれば、きっと、弟が困ることはないだろう。など、母の話を聞いて思った。最近ではディスレクシアの人でも見やすいフォントの研究や、読みやすくなる道具の開発も進んでいる。しかし、まだ日本でディスレクシアを知っている人は少ないと思う。ディスレクシアは遺伝する可能性があると思うので、私の子供や、その子の子供たちも、弟と同じ、「文字がゆがむ世界」に生まれるかもしれない。そう思うと、より多くの人にディスレクシア

を知ってもらい、文字がゆがむ世界があることが、当たり前になってほしいと願う。そして、少しずつでいいので、弟が文字のゆがまない世界の人に比べて、頑張っていたことを知ってもらえたら嬉しい。

でも、そんな私にいつも母は、こう言う。

「誰かと比べなくていいんだよ、幸せが逃げていつちやうよ。」

分かっているけれど、なかなかそれが難しい。今日も嫌いな昆虫の名画を見て、苦笑いしながら、私は弟と勉強している。